



## 支笏湖で脚光を浴びる表層の愛嬌もの 必然のシャロークランク

シャロークランク。

表層を泳ぐように開発された  
クランクベイトのことである。

およそトラウトとは結び付きにくい、  
ファットなボディーと激しいアクション。

ところが、あの支笏湖で、  
このルアーが威力を発揮しているという。

なぜ、シャロークランクなのか？

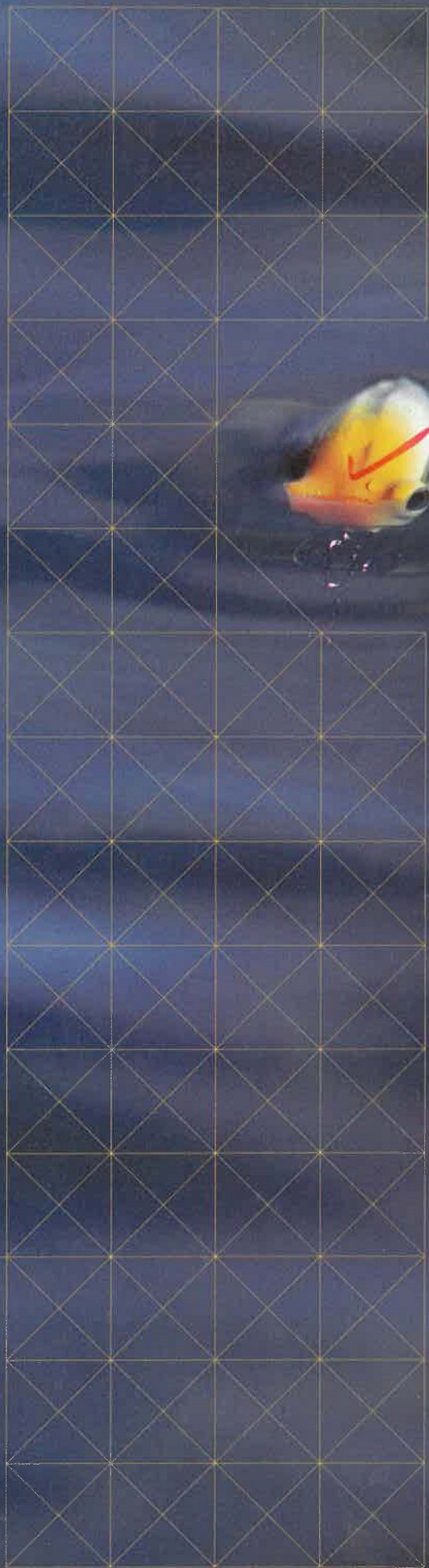
どんな使い方をするのか？

この釣りの全容に迫る

ラインの先に結ばれたルアーはグリグリと、小気味よい動きをダイレクトに伝えてくる。  
すぐ後方には木々が張り出していて、そこから落ち水面で身をよじらせる虫めがけ、「チビアメ」がバシヤと跳ねる。時折、沖めでドボンと、スローモーションのようにゆっくりと身を翻す大型魚。ここからでも何とか届きそうだ。  
日が完全に上りきった午前10時。約30m沖合のカケアガリで水飛沫が上がる。ヒット！ 大きな尾ビレが視界に入った。無事、岸に上げられたのは、50cmジャストのブラウントラウト。回遊魚を思わせる、砲弾状の銀色に輝く魚体は、近寄り難いほど美しい。  
その凛々しい口もとにがちりくわえられているのは、まるで不釣り合いなずんぐりむつくりのルアー、シャロークランクだった……。



\*1 大ききシルエットがセミに似ていることから使われ始めたシャロークランク。その効果は想像以上だった。\*2 貧栄養湖として知られる支笏湖だが、周囲には鬱蒼とした森が控える。陸生昆虫の種類や数はこのほか豊富



### ステージは表層

シャロークランクは正確にはシャローランニング・クランクベイト。特に表層を探るために開発されたクランクベイトのことをいう。その名を聞いて思い浮かぶのは、ピンポン玉のような丸みを帯びたユーモラスな形状と、元氣一杯の激しいウオプリングアクション。とても気難しい神経質なトラウトを誘惑するルアーには見えない。

しかし今、このシャロークランクが支笏湖のヒットルアーとして定着しつつある。この釣りの開拓者といえる千歳市の釣具店「清竿堂」の店主、二橋龍太郎さんによると、数はもちろんのこと、今年の夏までにニジマスは50cmオーバー、ブラウントラウトは60cmオーバーが数尾あがっているという。

でもなぜ、シャロークランクなのか？それは湖を取り巻く環境と無縁ではない。

支笏湖は決してエサが豊富とはいえない貧栄養湖として知られるが、その代わり周囲の森は今も原始を思わせるほど豊か。そのため陸生昆虫の種類や数が豊富で、セミやカメムシ、甲虫類など、いわゆる落下昆虫には恵まれている。目立ったハッチがないのにもかかわらず、時折ガバツと水面を割るトラウトは、これらの落下昆虫に反応していることが少なくない。

なかでも、ゴールデンウィーク前後から初夏にかけてのヒットパターンとして知られるエゾハルゼミは、支笏湖を語るうえで欠かせない。そのうえ「セミフライは11月頃まで釣れる」こともあるそうで、その有効性は季節を問わず高い。

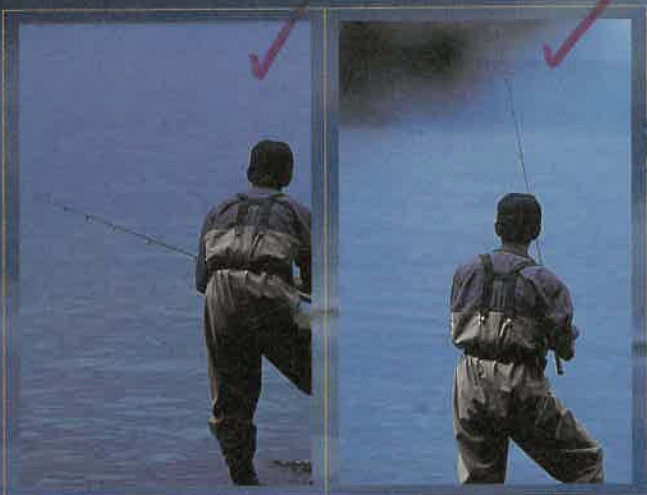
つまり、「支笏湖のトラウトは常に表層を意識している」のだと推察できる。仮にセミのシーズンが終わっても、魚には「エサは表層にある」という意識が刷り込まれているから、時期外れでも表層を



漂うセミのバターンに反応するのだから。当然、豊富な落下昆虫もこの現象に無関係ではあるまい。

水温やそのほかの諸条件によっても異なるが、5〜11月まで、ベタナギでも波があっても表層はヒット率が高いのはそのためなのかもしれない。つまり、いかにして表層を攻略するかが、支笏湖の重要なキーワードといえる。

そこでシャロークランクに白羽の矢が立った。このルアーはボトムとコンタクトさせることに主眼を置いたクランクベイトとは異なり、時にはトップウオーター・プラグのように使えることが特徴



### シャロークランクの条件

表層を探るだけでなく、シャロークランクがヒットルアーになり得たのにはいくつか理由がある。

だ。水面に微かに引き波が立つような演出だ。水面に微かに引き波が立つような演出だ。水面に微かに引き波が立つような演出だ。水面に微かに引き波が立つような演出だ。

泳ぎを損なわない範囲で、重ければ重いほどよい。それは当然飛距離を稼ぐ

次に重さ。基本的には泳ぎを損なわない範囲で、重ければ重いほどよい。それは当然飛距離を稼ぐ

また、形状だけでなく、アクションにも条件がある。シャロークランクのアクションは大きく分けてタイトウオプリングとワイドウオプリングの2タイプ。前者はボディの中央部を支点にきびきびと小刻みに動くタイプで、後者はボディの前部を支点に尻を大きく振るタイプ。支笏湖では、大きい動きが好まれていて後者のタイプに実績が高い。さらに、スロートリプルでもよく泳ぐことが要求される。

タックルは特別なものである必要はない。クランクベイトはベイトタックルで使うものといった印象が強いが、引き抵抗が少ないシャロークランクはスピニングタックルで充分。ロッドは湖で一般的に使われるフイット前後のライト〜ミディアムライト・アクション。ただし、バットがしっかりとったファーストテーパーだと操作性は高くなる。ラインは必要以上に細くなくても飛距離は稼げるので、平均的な6ポンド前後でOKだ。



### 必然のシャロークランク

\*3 支笏湖の魚たちは水面に対する関心が強い。こんな虫たちが水面で羽をバタつかせていた。\*4 リトリブやアクションの付け方は十人十色。離れるヒットパターンは、大きくさまざまなワッドで釣られている。それだけに誰にでもチャンスがあるというものは、水面下を泳がせたい時はロッドテイルを上向きに保持する。ベタナギの時はスロートリプルで魚に近づけるルアーを見たい。\*6 波がある時は魚が水面付近のルアーを見つけていく。そんな時はロッドテイルを下向きに構え、ルアーをなるべく潜らせてやるとよい。\*7 すなわち、ワットの形状が変化するシャロークランクたち。支笏湖では、5cm未満で潜行深度は50cm前後、尻振りアクションの大きいタイプの実績が高い。



\*8 最も期待が大きいマヅメ時。視認性にすぐれた白系のシャロークランクの出番だ。\*9 今回取材に協力していただいた千歳市内の釣りクラブ「アラブ・キングフイッシャー」のメンバーがヒットさせた50cmのアラウトトラウト。シャロークランクがゆらゆらと浮上し、次のリトリープに移行した瞬間にアタリがあった。\*10 回遊性を思わせる銀色に輝く魚体は再び冷涼な湖水に戻された。いつまでもワイルドなトラウトが支笏湖をにぎわせてほしい。

## 必然のシャロークランク



### メソッドはさまざま

リトリープ方法などに関しては、今のところ特別有効とされるテクニクは少なく、はつきりいって十人十色。ただ巻き、ストップ&ゴー、スロー、ハイスピード、どんな方法でも釣果が出ている。つまりそれほどシャロークランクの形状と動きが支笏湖のトラウトにマッチしていたともいえるだろう。アタリも、ルアーがゆらゆらと浮上してくる時や、ドライフライのようにただ浮かべておいた時、ただ巻きしている最中などいろいろだ。

シャロークランクで多くの釣果を上げている「橋翔大さんの場合、「リールのハンドルを2〜3回巻き、2〜5秒ポーズをとる」ストップ&ゴーが基本。ベタナギの時はロッドを立てて水面直下を泳が

せ、逆にやや波がある場合はロッドを下げ、なるべく潜らせるとよいそうだ。また、ライズしている魚をねらう時は魚にじっくりとルアーを見せることが大切で、特にポーズの時間を長くとることを心掛けていくという。ゴンとひったくるようなアタリは40cm前後の魚が多いようで、モソッと来るのは60cmクラスの大もののアタリだとも教えてくれた。

ポイントは基本的には季節や状況に応じて選ぶ。初夏なら岸からすぐ急深な場所、初秋なら水温が低い流れ込みなど。シャロークランクなら十分な飛距離とアピール度の高さで、ポイントを問わず活躍してくれる。そして、朝夕のマヅメ時はもちろん、日中にもヒットしていて、時間帯を問わず活躍してくれるのも頼もしいところ。もちろん、ニジマスでもブラウトトラウトでも魚種も問わない。このように、どんな状況でもオールマイテ



イーで使用できるのがシャロークランクの大きな利点でもある。

カラーは朝夕の暗い時間帯は白系で、日中は黒系。このセオリーはほかのルアーやフライにも通じるが、シャロークランクでも変わらない。

「高度なテクニクは必要ない」と「橋さんが言うように、ビギナーでも大ものをヒットさせるチャンスは充分にある。昨年は11月の中旬まで釣果が聞かれていて、今年の秋もその威力を発揮してくれるはず。特に台風の後には多量の虫が水面を漂うのでチャンスだ。

小振りでも十分な飛距離が得られ、止めると水面にポツカリと浮かび、引くと水面直下から表層を激しく泳ぐ。そして時間帯やポイント、魚種を問わない汎用性……。

シャロークランクがヒットルアーになり得たのは決して偶然ではないはずだ。